

# 親鸞教學

究竟なるもの —入出二門の源泉—	安田理深 1
如来の本願と「唯除」 —大悲の論理—	小野蓮明 14
『唯信抄』撰述の背景	細川行信 26
法然浄土教における 伝統と自証について —特に親経疏を中心として—	坪井俊映 35
真宗僧伽の原点 —因位の魂—	大城邦義 51
宗祖における獲信の構造	和田真雄 61
教相の伝統	曾我量深 71
真言と解釈(3)	金子大栄 85

32

大谷大学真宗学会

大乘は二乗・三乗有ることなし

二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり

一乗は即ち第一義乗なり

唯是れ誓願一佛乗なり

(行卷)

編集後記

真宗の学びにおいて、最も大切なことは、師と仰ぐ人との邂逅である。このことは、真宗学を志す者が、つねづね先輩より注意されることであるが、再考するまでもなく、この言葉は、すぐさま、「君は一体自己の師と呼べる人と出会ったか」という鋭い問いとなって自分に跳ね返ってくる。それは私たちがどれだけ本気で真宗を学んでいるか——という問いにひとしい。確かに、師をもたない真宗学、人格を通さない真宗学は、血の通わない、独善的なものになってしまう危険性がある。たとえその内容が十分に科学的であってもである。

ところが真宗の学びにおいて、最も困難なことは、よき師との邂逅である。仏道への血路が開かれるのは、ただ邂逅の一事によらぬことを、先哲は説いてやまない。「幸に有縁の知識に依らずは、争でか易行の一門に入ることを得んや」と『歎異抄』に語られる。邂逅なくして、仏道なし、とまで極言されているのである。一方私たちの現実はどうか。実に多くの先生、先輩、友人、書物などに取り囲まれながら「よきひと」と真実に出遇

うことは稀である。身近に「よきひと」がないのでは決してない。問題は、よき師の存在を知りながら、知らず知らず師から離反していく現実である。一方では真宗学に身をおき、他方ではマイホームの営みに身を埋没させている。この巧みな人生の使いわけにしばしば陥いる。わが身を資めるばかりではこの人生の二重構造は解消しない。この矛盾は、ある意味で、世俗化された現代に求道することの困難さである。この困難を乗り越えることは容易ではない。それは自我否定へと向う宗教と、自我を高揚せんとする現代との相剋である。この谷間に私たちは、今投げ出されているのである。この現実を更に直視しなければならぬ。

\* \* \*

曾我先生、金子先生、安田先生の講義には、毎号のことながら、新めてその信仰表現の自由さ、源泉滾々たる有様に、心打たれる。細川行信先生と坪井俊映先生には、昨年度真宗学会大会の講演から筆録させていただいた。両先生にはお忙しい中、加筆・訂正していただいた。研究論文として、小野蓮明先生に玉稿をいただいた。また、大城・和田両君には最近の成果を纏めていただいた。(安富)

昭和53年6月20日 印刷  
昭和53年7月1日 発行

親鸞教学 第32号 辛 650

京都市北区小山上総町22

大谷大学真宗学会

親鸞教学編集部

発行人 広瀬 果

大谷大学真宗学研究室 振替 京都 8225番

京都市中京区寺町通三条上ル

文栄堂書店

振替 京都 2948番

京都市下京区七条御所ノ内町50

中村印刷株式会社

電話 (313) - 0468番

編集  
発行

発売

印刷

親鸞  
教学

第三  
二号

昭和  
五十三年  
七月一日  
発行

大谷  
大学  
真宗  
学会